総合研究大学院大学海外学生派遣事業　実績報告書

文化科学研究科 日本歴史研究専攻
博士後期課程２年　君島彩子
海外派遣先国名：ドイツ
海外派遣期間：2015 年 8 月 16 日～8 月 31 日

１、海外派遣先

8 月 16 日から 22 日までベルリン市内で戦争犠牲者の慰霊施設、博物館、図書館で調査をおこなった。8 月 23 日から 30 日までエアフルト大学で開催された「XXI. World Congress of the International Association for the History of Religions （第 19 回国際宗教学宗教史会議世界大会、以下 IAHR と表記)」に参加し、口頭発表をおこなった。

２、海外派遣前の準備

渡航前にベルリン市内の「慰霊・追悼」に関する論文や記事などの情報を集めた。特に、2015 年 8 月に出版された安川晴基「ホロコーストの想起と空間実践―再統一後のベルリンにみる「中心」と「周辺」の試み―」(『思想』、岩波書店、2015 年）はベルリン市内のホロコーストに関するモニュメント等を調査するうえで重要な資料となった。

渡航前日が終戦記念日にあたる 8 月 15 日であったため、渡航直前まで日本国内で戦争犠牲者の慰霊に関する調査を進めていた。日本各地で調査をおこなっていたため、ドイツでの調査の事前準備が十分であったとは言い難い状況であったが、一方で戦後 70 年という節目の年であることから、日本国内においても戦争に関する展覧会が開催されていた。そのため、ベルリンの戦争に関する展覧会との比較ができた。

IAHR の発表については、事前にハンドアウトとスライドを用意していた。ただしハンドアウトはベルリンで調査をおこなった後に書き直した。

３、海外派遣中の研究活動

・ベルリン市内での調査

「戦争と暴力支配の犠牲者のための国立中央追悼施設」であるノイエ・ヴァッヘ（Neue Wache）①は、ベルリンの目抜き通りウンター・デン・リンデン街に位置する。プロイセン国王によって立てられた衛兵所であった新古典主義の建築を改造したものである。ノイエ・ヴァッヘは国の中央慰霊施設であるが、多くの観光客が訪れ、写真撮影をおこなう観光名所で、日本の千鳥ヶ淵のような静かな慰霊空間とは異なる印象をうけるものであった。

ノイエ・ヴァッヘの中央には、彫刻家ケーテ・コルヴィッツが第一次世界大戦で死んだ息子をイメージして作った「ピエタ（死んだ息子を抱き抱える母親)」の拡大レプリカが設置されている。報告者はケーテ・コルヴィッツ美術館を訪れ、オリジナルの「ピエタ」②を調査した。また文献調査によって作者の死後に彫刻が拡大された点、キリスト教徒以外の戦争犠牲者を追悼するうえで「ピエタ」という題材が相応しいのかという点が批判されていることが明らかになった。「ピエタ」という聖母的なイメージが戦争の犠牲者を追悼するうえでどのような意味をもつのか、自分自身の研究を進めるうえで重要であると思われた。

ベルリンで最も知られた観光名所であるブランデンブルグ門内に、「沈黙の間」と呼ばれる部屋が作られている。「沈黙の間」は宗教、人種、国を超え、全ての人が沈黙できる空間である。入り口には各国の言葉で「平和」の語がかかげられているが、室内は一枚のタペストリーがある以外に何の装飾もない。ここには直接、戦争の記憶を想起させる言葉はないが、外の喧騒と切り離された静かな空間は、追悼の空間にもなりえるものであろう。

ブランデンブルグ門の南側には「虐殺されたヨーロッパのユダヤ人のための記念碑」（通称、ホロコースト記念碑）③がある。コンクリート製の 2711 個の記念碑が規則正しく並ぶ風景は、墓石や棺を想起させる。しかし文字の刻まれない記念碑は、極めて匿名的で集合的なものであった。ホロコースト記念碑の地下はホロコーストの情報センターとなっており、亡くなった人々の個人史が、写真や遺品、そして言葉によって語られている。記念碑の匿名性とセンター内に展示された「失われた個人史」が印象的であった。この対照的な関係によってホロコーストによる「喪失」が強調されているとも捉えられるだろう。

ホロコーストによる「喪失」を象徴するというコンセプトは、ベルリン・ユダヤ博物館にも見られた。建築家ダニエル・リベスキンドによる特徴的な建物のベルリン・ユダヤ博物館は、建築自体が「喪失」を表現する構造になっていた。建物内に、何もない空間「VOID」が複数作られている。「VOID」はホロコーストによりできた空白を記憶するための空間であり、鑑賞者が入ることの出来ない空間である。唯一「Memory Void」と呼ばれる空間のみ入ることが可能である。この空間には、メナシェ・カディシュマンのインスタレーション作品、「Shalechet (Fallen leaves)」④がある。顔のように見える穴の開けられた丸い鉄板が床一面に敷き詰められ、鑑賞者はその上を歩かなければならない。丸い鉄板は、ホロコーストの犠牲者の顔をイメージしたもので、その上を歩くと大きな金属音が空間内に響きわたる。亡くなった人々の顔を踏むことは日本ではなかなか考えられないものであるが、視覚だけでなく触覚、聴覚によって「喪失」を体感するものと言えるであろう。

ベルリンではホロコーストの記憶と「喪失」が強く結びついていた。カール・ビーダマンの彫刻「誰もいない部屋」⑤、ライナー・ゲルズの「鏡の間」、クリスチャン・ボルタンスキーの「ミッシング・ハウス」など、町の中にも、そこで生活していた人々が今はいないこと、つまり「喪失」を表現するアート作品が設置されている。特に、グンター・デムニヒの「躓きの石」⑥はベルリン市内のあちらこちらで目にすることができた。「躓きの石」は、ホロコーストによって殺された人々が、かつて住んでいた家の前に埋め込まれている。金属製のプレートには、故人の名前、生没年、移送先、そして亡くなった場所などが記入されている。「今は存在しない個人」が「かつて存在していた」ことを、個々の場所と関連づけ想起させる作品と言えるだろう。失われたものを表現することにおける抽象化と個別化という視点は今後も調査を進めるうえで重要であると思われた。

ここまでに述べた施設や作品は、東西ドイツの統一後に作られたものである。これらに対して統一以前に作られたモニュメントにはまったく指向が異なっていた。最も特徴的なものは、戦後すぐに作られたソビエトのモニュメントであろう。1949 年、旧東ドイツのトレプトウにソビエト慰霊公園 (Sowjetisches Ehrenmal im Treptower Park)⑦が作られた。戦没者の墓地もかねた公園で中央に 12 メートルの巨大な兵士の像が立つ。兵士の像は、砕かれた鉤十字の上に立ち、右手に剣を、左手に子供を抱えている。両側にソビエト兵の戦いとそれを支える市民の姿を刻んだ大きな石のレリーフが 16 枚と、赤旗をイメージしたオブジェが並んでいる。レーニンの肖像やソビエト兵を讃えるスターリンの言葉が刻まれ政治色の強い慰霊公園となっている。一方で公園のはずれに兵士の像と向かい合うように、「ロシアの母」と呼ばれるうずくまる女性像が立てられている。この「兵士」と「母」の関係性は、戦争死者慰霊における「母性」という自身の研究テーマともつながるものであった。

この他に、ドイツ歴史博物館では特別展「1945 Defeat. Liberation. New Beginning. Twelve European countries after the Second World War」を見学した。ヨーロッパの 12 の国の「1945 年」に関する資料が集められた展示では、ドイツも 1 つの国という扱いであった。最初の説明文にも世界全体とヨーロッパにおける第二次世界大戦の犠牲者数が明記されていた。この夏、日本で「戦後 70 年」に関する展示をいくつか見てきたが、日本人の犠牲者数の明記はあったが、世界全体、またはアジア太平洋地域に暮らす人々の犠牲者の総数が明記されているものはなかった。このような点からも戦争展示の違いを感じた。

・IAHR の参加と口頭発表

エアフルト大学⑧で開催された IAHR に参加し、パネル「Fluidity and Hybridity of Religious Innovation in the Contemporary Japan」において、「The Maria Kannon of Modern Japan : Image of the Kannon and the Virgin Mary as war memorial」というタイトルで口頭発表をおこなった。

発表では、グアム島、サイパン島、レイテ島、硫黄島など太平洋戦争の激戦地であった地域に「マリア観音」と呼ばれている観音像が数体あることに着目し、戦争死者慰霊において、「マリア観音」という名称が使われるようになった背景を考察した。まず観音が日本においてどのように受容され、女性的、母性的な菩薩であると考えられているという前提の説明をおこなったうえで、隠れキリシタンの信仰対象であった「マリア観音」について論じた。またマリア観音と戦時期の女性の表象に関する先行研究において、若桑みどりの研究が重要であることを述べた。さらに、これまで太平洋諸島における戦没者慰霊の研究は、遺族や戦友による遺骨収集や慰霊巡拝を中心におこなわれてきており、先行研究によって遺骨収集や慰霊巡拝をおこなうかで、死者の霊を慰め、戦争の記憶を留めるため多くの慰霊碑が建立されてきたことが明らかにされていることを述べた。

そして、硫黄島とレイテ島に建立されたマリア観音の紹介をしたうえで、昨年調査をおこなったグアム島とサイパン島の事例を中心に報告をおこなった。初めにグアムのジーゴ平和慰霊公苑に内に建てられた「我無山平和寺（House of Prayer for Peace)」の本尊はマリア観音と呼ばれていることを紹介した。この観音像は、聖母マリアの「愛」と、慈母観音の「慈悲心」を表現し、敵味方問わず全ての戦争の犠牲者を慰霊し、世界平和を祈念するとされている。毎年、日本の仏教僧とグアムのカトリックの大司教による合同慰霊祭でおこなっていたが、近年この慰霊祭は「マリヤ観音フェスティバル（Mary Kan-non Festival)」と呼ばれるようになった。続いて、サイパンのシュガーキングパーク内にある「南溟堂（The Saipan International House of Prayer)」の本尊であるマリア観音を取り上げた。南溟堂は、僧侶によって建てられた寺院風の建築であるが、マリアのように子供を抱く母の像が中心に置かれていることから、近隣の住民のなかには日本人が建てた日本様式のキリスト教の教会であると考えている者もいる。

グアムとサイパンのマリア観音は、相互の情報交換をおこなわず、異なる人物によって祀られたものであるが、共に怨親平等に戦没者を慰霊するものであった。遺族や戦友が慰霊巡拝に訪れるようになると現地の人々との交流が生まれ、日本人だけではなくアメリカ兵や原住民の慰霊もおこなうことが望まれるようになったと考えられる。怨親平等の戦没者慰霊をおこなうなかで、仏教とキリスト教の融合を象徴する言葉として「マリア観音」という名称が使用されるようになった。さらに、死者を慰める者の表象として子供を抱く母の姿の像は、既成の宗教には囚われない形で、地域の住民に受け入れられていた。その結果、「死者を慰める母」と「怨親平等」を合わせた象徴として、「マリア観音」は太平洋の島に祀られたと結論づけた。

会場からは、戦争死者慰霊の観音像が日本国内にどのくらいあるのか、また観音を立てる活動の中心となった団体等があるのかといった質問が出され、返答の中で自分の博士論文の概要についても説明をおこなった。しかし観音に比べてマリア観音の事例は少ないため、マリア観音建立を戦争死者慰霊においてどこまで一般化することができるのか、今後の課題も見えてきた。

自分自身の発表以外では、主に仏教に関する発表を聴講した。日本の仏教研究は、教義研究が中心であるのに対して、ヨーロッパでは、仏教美術研究や物質文化を中心にした研究もおこなわれており、仏像を中心に研究を進めて行くうえで学ぶことが多かった。また発表についての質問をおこなうなど交流をもつことができた。

4、海外派遣中におこなった研究以外の活動

空いた時間は、できるかぎり宗教施設や墓地を訪れことに使った。さらに現地に住む方々と交流することができた。ベルリンではベルリン在住のアーティストの方と食事をする機会を得た。もともと美術の研究をしていたので、ベルリンの現代美術作品についての会話を楽しんだ。またエアフルトでは学会終了後に多くの宗教研究者の方と食事をする機会を得た。会話のスピードや、海外の宗教学の話題についていくのが必死であったが、非常に良い勉強になった。日本では普段接することの少ない方と共にお酒を飲む機会は良い経験になった。ドイツということもありビールが安くて美味しかったが、レセプションなど公式の席ではワインが主流であり、文化の違いを感じた。

5、海外派遣費用について

今回は８月の渡航であったため航空券が高かった。またエアフルトはホテルの数が少なかったので、ホテル代がベルリンよりも割高になった。食費などは安くすんだが、交通費は割高であると感じた。

6、海外派遣先での語学状況

ベルリンでは比較的英語が通じた。特に博物館や図書館などは英語のパンフレットが用意されており、キャプションも英語が併記されていた。またユダヤ博物館の常設展示は日本語の音声ガイドが用意されており、とても理解しやすかった。

エアフルトは、大学構内で学会に参加している間は特に問題なくなかったが、一歩大学の外へ出ると、旧東ドイツということもあり全く英語が通じなかった。鉄道のインフォメーションでも英語が通じないため非常に苦労した。さらに博物館のキャプションもドイツ語表記のみで驚いた。このような経験から簡単なドイツ語を学んでおけばと後悔した。

7、海外派遣先で困ったこと

渡航の前日にベルリンの気温を調べたところ 35℃であった。夏服にサンダルで渡航したが、ベルリンに到着した時の気温は 13℃まで下がっており、とても寒かった。急に寒くなったため、滞在先でセーターやカーディガンを購入した。気温の変化に対応できる服の準備をしておくべきであった。

8、海外派遣を希望する後輩へアドバイス

私は今回初めて国際学会へ参加しました。私の分野（宗教学）では日本国内で英語を使って発表する機会がほとんどなかったので、英語で自分の研究内容を伝えることに苦労しました。しかし、様々な方から自分の研究に対するコメントをいただくことができ、研究の視野が広がりました。特に文化科学研究科の学生は英語で発表する機会が少ないと思いますが、学生のうちに国際学会で発表をしてみるのは良い経験になると思います。

①ノイエ・ヴァッヘ

②ケーテ・コルヴィッツ「ピエタ」

③ホロコースト記念碑

④メナシェ・カディシュマン「Shalechet」

⑤カール・ビーダマン「誰もいない部屋」

⑥グンター・デムニヒ「躓きの石」

⑦トレプトウ・ソビエト慰霊公園

⑧エアフルト大学